

ており、柱痕の可能性が考えられる。柱穴の埋土中に遺物は確認されなかったが、柱穴と溝が近接する地点においては、溝状遺構が柱穴を切っていたことから、建物は溝状遺構の構築前に存在したと考えられる。

溝状遺構

調査区西側より検出された。遺構は幅約80cm、深さ約60cmであり、南北方向から約10°西に傾く方向に伸びている。断面はU字状を呈していた。断面を観察すると、溝の埋土は黒褐～暗褐色のシルト質土が主体となるが、2層と6層（附編では7層）は黄褐色砂質土を多く含んでいた。このほか3層上面は硬化していた。

2, 3は遺構からの出土遺物である。2は埋土中位（3～5層）からの出土遺物である。中世に相当する。3は6層からの出土遺物である。

第Ⅳ章 総括

検出された溝状遺構の埋土を分析した結果、6層（第Ⅴ章では7層）は霧島高原スコリア（1235年降灰）、2層は桜島文明軽石（1471年降灰）であった。6層から古代の須恵器が出土し、3～5層から中世の陶器が出土したこともそれを裏付けている。よってこの遺構は古代に構築され、直後に霧島高原スコリアの降灰により僅かに埋没したものの、200年以上の間、窪みを維持しながら徐々に埋没し、桜島文明軽石により大きく埋没したと考えられる。埋土中に見られる硬化も、この遺構が道として使用された事を示している。埋土からはススキやネザサなど、日当たりがよく定期的に手入れされる環境で繁茂する植物の珪酸体が多く認められるが、これは道として使用するにあたって、定期的な刈取りや火入れ等の管理が行われたことを示している。

現在、調査区の東側には、宮崎平野を南北に横断する市道大島通線が存在する。1988年の開通前は、調査区の西に隣接する道がその役割を担っていたことが、明治期の地図から確認することができる。今回調査された溝状遺構（道）は、この道の数百年前の姿である可能性が考えられる。

第1表 権現町遺跡出土土器・陶磁器観察表

遺物番号	出土遺構	出土層位	種類	器種	部位	焼成	調整		胎土	備考
							外面	内面		
1	—	—	土師器	甕	口縁部	良好	丁寧なナデ	不明	小石：多	
2	溝状遺構	1	陶器	甕	胴部	良好	丁寧なナデ	丁寧なナデ	白色粒子：少	
3	溝状遺構	6	須恵器	甕	胴部	良好	線状叩き目 →横位刷毛目	ナデ？		

第2表 権現町遺跡出土石器観察表

遺物番号	出土遺構	出土層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
4	溝状遺構	1	二次加工剥片	頁岩	11.4	6.1	1.9	200	